

つなし
大黒舞は津無の誇りです

津無郷土芸能保存会

小谷 孝忠 さん
Yoshitada Kodani

平成16年の合併記念式典でも好評を得ました。

復活した大黒舞

「エーコレ、大黒舞を見んさいなア」の歌声にあわせて踊るユーモラスな「大黒舞」。以前はあちこちで踊られていましたが、今や県内では佐治町津無集落の「津無郷土芸能保存会」が歌い、踊り継ぐばかりとなりました。

「津無でも、何度か踊りが途絶えかけたんです。平成元年に国府町で因幡の民踊の祭典があって、出演を依頼されて、そのときに今の会を結成しました」と会長の小谷孝忠

さんは振り返ります。

当時の平均年齢は20歳くらいと若く、勢いがありました。踊りを覚えていた先輩から振り付けを教わり、なんとか全員が踊れるようになりましたが、歌の方は歌詞が残っておらず、大変だったとのこと。

「実は、私の父も歌っていて、古い録音テープが残っていたんです。雑音の中から苦労して歌を聴き分けて、ようやく歌も復活できました」と小谷さん。実は小谷さんは安来節の名手。見事な歌声で踊り率います。

大舞台で演技

平成元年の民踊の祭典で高い評価を受けたため、平成3年に高松で行われた中四国の民俗芸能祭に派遣され、さらには平成5年には岩手県で行われた全国大会に出演しました。「今でもメンバーは『どこか遠くから要請がないだろうか』なんて言っていますよ」と小谷さんは笑います。

全国の舞台で評判を得て、鳥取でも出演の依頼が多くなりました。テレビ局の取材も多いそうです。

今年からパレットとつとりなどで行われている「因幡の郷土芸能祭」にも二度出演しました。

「第2回に初めて出演したんですが、ほかの団体は三味線を持っていたり『先生、先生』なんて言っていたり。でもうちはわら靴ばきの素朴な踊りでしょう。メンバーが怖じ気づいてしまっただけ。でもうちのはその素朴なところがいいんですよ。『絶対負けりやせん』とどやしつけました」と小谷さん。その心意気で踊りに力がみなぎります。

佐治天文台長

こうさいひろぎ
香西洋樹の「暗い夜空が教えるもの」

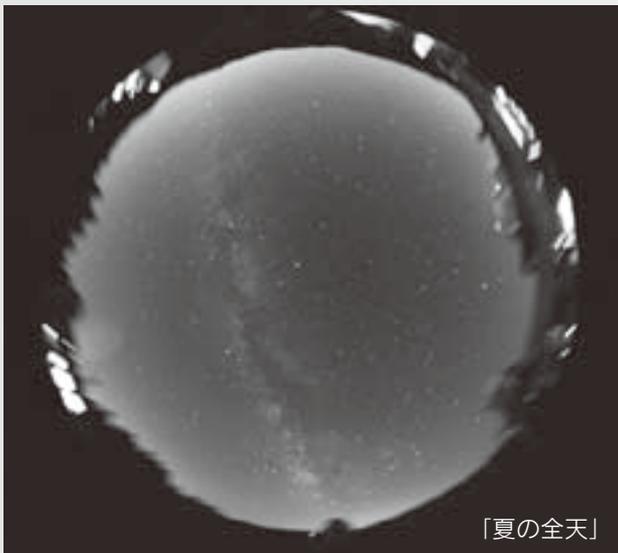
Vol.22 夜空がなぜ明るい

夜空はなぜ暗いのでしょうか。「太陽がないからだ」。もっともな答えですね。太陽の強い光にかき消されて、淡い光の星など見えなくなってしまうのは当然です。

ところで、佐治天文台では、昼間の星を来館者の皆さんにご覧いただいています。昼間でも、星はちゃんと光り輝いているのです。では、どうして肉眼では見えないのでしょうか。

その訳は、地球を取り巻く空気の中に含まれている小さいゴミや塵、そして水蒸気、さらに分子と呼ばれる元素の集まりに太陽の光が反射して四方八方に跳ね返され、昼間の空を明るくしているからです。ちょっとでもモヤや霞がかかると遠くの景色は見えにくくなりますね。それと同じような状態とを考えてください。

この現象から、夜空が明るくなっている状況を推測できます。そう、地上から夜空に向けられている人工灯火の光が原因なのです。夜空に向けられている人工灯火と空気中の塵やガスの影響で、夜空も明るくなっているのです。本来、夜は暗いものであり、夜が明るいのはとても不自然です。そして、環境が不健康になっていることを教えてください。



「夏の全天」

StarWorld
見上げてごらん



ご近所の初盆で踊りを披露。子どもも思わず踊りだします。

ユーマも進化

大黒舞踊りは、紫のずきんに紫の着物、裁着袴たつひばかまにふんごみ（わらの長靴）というユニークなもの基本で、夏場には浴衣ゆかたでも踊ります。

「いつだったか、私が前で歌っていると、客席から『ごうごう』と笑い声が上がったんですね。何かと違って後ろを見たら、踊り手の一人が、わら靴が滑って転びそうになっていたんです。これはいいと思って、以来そういう振り付けを入れるようにしました」と小谷さん。まさに、転んでもただでは起きないユーマ精神で、大黒舞を進化させています。

地域に密着

大黒舞は、元々は正月の祝いの踊りで、今でも元旦には集落のそれぞれの家を回って踊ります。また、お盆の時期には初盆の家で踊りを披露します。

12人で踊り継ぐ

小谷さんは「私は『地元を大切に』と思ってるんです。敬老会などでも、依頼があれば必ず踊ります。メンバーが『見る人ももうみんな飽きてますよ』なんて言うんですが、『飽きてても踊るんだよ』とハッパをかけていますよ」と力を込めます。

今のメンバーは12人。平均年齢は高くなりましたが、それでも40代、元気いっぱい踊ります。以前は定期的な練習していたそうですが、みなさん仕事が多忙ですが、今では出番の2週間前から集まって練習します。

「踊りは安定してきましたが、歌の後継者が問題です。見よう見まねで歌えるものではないので、でも、二人のメンバーにがんばってもらっています。やはり、『佐治には津無の大黒舞がある』ということを知ってほしいですね。末永く伝承していきたいと思っています」と小谷さんは目を輝かせます。

ユーマスな大黒舞の踊りが、佐治の谷に響く歌声とともに、いつまでも踊り継がれていくといいですね。